
ゲモゲモ・プチラモラ

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲモゲモ・プチラモラ

【Nコード】

N8772M

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

聞くとなぜか頭をループする音楽というのがある。「ゲモゲモ・プチラモラ」もなぜかそうであった。だが、その音楽は実は、人々を洗脳させ破滅に追い込む恐怖の音楽だった……！！！！

実はゾンビ物みたいな話です。

プチラモラは始まった

さして大した内容もない癖に、一度聞くとなかなか耳に付いて離れない旋律と言うのがある。ゲモゲモ・プチラモラと言う歌もそのような力があつた。赤ヘルと言う、名のごとく赤いヘルメットを被つた歌手が歌つた曲だ。毎回ヒットランキングで一位に登場した。以下のような旋律と歌詞である。

> i 9 9 0 8 — 1 4 1 7 <

こんな下らない歌が、ライブで何度も上演され、着メロナンバーワンにランクインされ、カラオケで必ず歌われていた。それもひとえにこの曲の依存性のような印象の強さである。これが、何故そんなに意識に残るのか全く不明であつた。他の印象的な旋律はあるはずなのに、これだけはどこか不自然に聞く者の意識に刻み込んでいたのだ。「ゲツモゲモツ、プーチラモラ」と呟く人々のなんて多い事か。

相田小見郎という学生はその不自然さに疑問を抱いていた。ひょっとしてこれは旋律や歌詞そのものに印象の効果があるわけではなくて、実は他に要因があるのではないか、それをあらゆる友達に話した所、つぎつぎと共感者が現われた。それはやがて5〜6人と少人数ながら「ゲモゲモ・プチラモラ反対の会」略して「反ゲモの会」を作るまでに至った。

彼らのメンバーは、相田の友達である。男性は相田小見郎、藤上学、様田曾根次郎の3人、女性は牧中菜穂子、琉田龍子の2人である。

今日も「反ゲモの会」がカフェにて開かれた。まず相田が口を開いた。

「どう思う？どうしてあの歌があんな頭に残るのだと思う？」

「そりゃ、たまたまそうだったとも考えられるが……」

「いや、それはほぼありえない。考えてみる、クラスの誰もがゲモゲモ・プチラモラを名曲と崇めていて、僕達も変に印象に残って、何度も頭の中で再生されるのは事実なんだ。つまり僕達の身の回りでほぼ全員がゲモゲモ・プチラモラの影響を受けてるんだ。これは、嗜好性の違いで考えてみたらおかしいんじゃないか？一人もあれは下らないとは無意識では認めてない。僕もこう話しているが、しばらくしたらあの旋律が頭に来るかもしれない。」

「でも、じゃあなんで……」

「私の考えなんだけど。」

「なんだ？琉田さん。」

「なんかエスパー的なものじゃないかな。赤ヘルがそんな力をもつてて、人々を洗脳するみたいなの。」

翌日も翌々日も同様にカフェで「反ゲモの会」は話し合っていた。だが会話は依然不毛な状態で、ひよつとしてこの疑問は単なる杞憂に過ぎないのではないか、ただのひねくれた考えではないかと影で思うようになった。やがて人は減り、相田一人になってしまった。

そして一人でカフェで珈琲を飲んでいた時、二人の女性が話していた。

「……それでさー、あいつね、何言っただと思う？」

「え、何何？気になる。」

「『僕が人間関係のコツを教えてあげるよ』って蟹子に言ったんだって！」

「うっそ、あんな人格破綻者が！？まじうける。」

「あはっははは。」

その時一方の女性の耳に「プーチラモラ」とうなる声が聞こえた。
「誰か私に囁いた？」

「いや？なんも聞こえないし、だれも近くにいなかったよ。」
しかし再び「プーチラモラ」のうなりが聞こえた。

「ほら、プチラモラって。」

「そんなわけが。」

プチラモラと聞いて相田は警戒した。

やがてその女性への「プーチラモラ」のうなりが徐々に繰り返され、そのうちどこからともなくそれに合わせて伴奏のドラムが聞こえて、「プーチプチ言っちゃうよー」「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー」などと妙なうなり呟きのような掛け声が聞こえた時、彼女の目の前の視界が奇妙に歪みだした。突然正気を失い始めたかもしれない、と彼女は怯え、脳内に迫り来る「プチラモラ」を追い払おうとうめき声を出してもがいた。それははたから見ても、突然彼女が目に見えない何者かに怯えて苦しみ出したように見えたので彼女の友達が話し掛けた。

「くみちゃん、大丈夫？」

くみちゃん、と呼ばれた彼女はやがて頭を抱えて激しくかぶりをふった。いまや彼女の意識内は突如襲い掛かった「プーチラモラ、プーチラモラ」「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー」「プチプチ言っちゃうよー」の各掛け声が繰り返され複雑に入り交じって増大しており、今や彼女を発狂寸前まで追い詰めようとしていた。

「くみちゃん！」

その時、くみちゃんは壊れた。椅子から立ち上がり激しく歌いなが

ら踊りだした。

「ゲツモツゲモツ、プーチラモラ！私もみんなも繋がるー！」

「くみちゃん！」

友達は止めようとするが彼女は何かに憑かれたかのように踊り狂った。

「ゲツモツゲモツ、プーチラモラア！あなたも一緒にプーチラモラー！」

最後の「プチラモラー！」の時に彼女は突然友人の方に両腕で指した。指された友人はなにか冷凍光線でも受けたかのように硬直し痙攣した。程なくして友人も一緒に「ゲツモツゲモツ！プーチラモラア！」と歌い踊った。狂気は伝染し、次々と人々が踊りだした。

相田は思わずカフェを抜け出した。大変だ！不可解ではあったが一つだけはつきりしていた。赤ヘルの歌う、ゲモゲモプチラモラが人類を洗脳しようとしている……

プチラモラは始まった(後書き)

楽譜作成・・・ぬじゃわきし

プチラモラは広がった

相田は「反ゲモの会」の人たちに至急携帯電話でメールを打った。
「ゲモゲモ・プチラモラがついに暴走、人々が我を忘れて踊りまくっている、気を付けよ、桂駅前にて待っている。」

藤上学はたまたま牧中菜穂子とばったり会った時にそのメールを二人で見た。桂駅は歩いて数分だ。急いで彼らは向かった。

琉田龍子はそのメールを見た時、何が起きたかを察した。集団としてそれが発生した今はこちらも一人ではいられない。琉田は急いで電車に向かったが間に合わず、次の電車に乗った。

その彼女の乗り過ごした電車内でメールを見た様田曾根次郎は最初意味が分からず相田とやり取りする内に分かってきた。幸い現在乗っている電車は桂駅に向かっている。様田は怯えながら窓の外の景色を眺めた。

様田の背後からズダダンと携帯の着信のドラムの電子音が聞こえた。なんだよ、マナーモードにしるよと様田が思った時、次に流れてきた旋律に彼は凍えた。

「ゲツモツゲモツ、プーチラモラア……」

携帯の持ち主は突然踊り出した。様田は焦った。

「あなたも一緒にプチラモラー！」

どんどん持ち主の彼の周りから踊り始める。歌に影響された者は皆その“狂気”に冒され、それに負ける。様田は思わずドアをぼんぼん叩いて「出してくれ！出してくれ！」と叫んだが電車は依然走り

続ける。

「プーチラモラ、プーチラモラ」

とうとう様田を除いて皆狭い車内で踊り出していた。体をぐいぐい押しつけられ、そして様田の脳内にも危機が迫っていた。プチラモラへの誘惑は彼を狂気にせずはいられない程強力だったが、彼は必死に抵抗し、堪えた。だが勝手に口が呟き出した。

「…プチプチ言っちゃうよー、プチプチ言っちゃうよー、…」

“冒”された人々は様田を見つめながら無言で踊っていた。そのリズムに合わせて様田は呟かされた。足腰や背中が痙攣し勝手に踊りだそうとしているが、様田は最後の抵抗を目論んだものの、やがて踊りだした。電車は桂駅に向かっていった。

その桂駅で相田は藤上と牧中と再会した。

「無事だったか二人とも。」

「大丈夫。あれ？琉田と様田は？」

「琉田ちゃんは電車に乗り遅れたって。様田は確かこの駅の次の電車で来るはず。」

「そうか。じゃあすぐじゃん。」

牧中がそう言ったが、その通りで、「1番線電車が停まります」のアナウンスが流れ、その後電車は停まった。

「様田くん着いたね。」

そしてドアが開いた。すっかり洗脳された乗客が「プーチラモラ、プーチラモラ、」と連呼しながら行進して接近した。

「ぎゃあ！」

「逃げよう！」

「何やってるの！牧中！」

牧中は横に広がった人々の行進の真前でつつ立っていた。そしてう

わごとのように「プーチラモラ、」と呟いていた。それを見た藤上は、

「牧中！」

と叫んで彼女を抱えて相田の方に戻った。彼女も正気に戻ったらしく、「わたし…何をやってたの…」とわなないていた。

「愚図愚図している場合じゃない。早く逃げよう。」

桂駅行きの電車に乗り遅れた琉田は再び次の電車に乗った。だがしばらく後に相田からメールが来た。

「桂駅付近がやられた。早く逃げろ。」

琉田は血相を変えて急いで降り、逆方向に必死に逃げ出した。よく見ると、すでにここにも侵略が始まっている。

「ねえお母さん、ゲーム買いたい。」

「だめよ、だめ、だ……ッモツゲモツ、プーチラモラア！」

「お母さん？」

「わたしもみんなも繋がるー！」

「お母さんどうしたの！こわいよ！お母さん！」

「ゲッモツゲモツ、プーチラモラア！」

「お母さん！戻って！おかああああああゲッモツゲモツ……」

「えゝこの方程式を解くわけなんです、真田くん、どんな式を使えばいいかわかるかな？」

「はい、先生、それはゲッモツゲモツ、」

「真田くん、ふざけ！プーチラモラー！」

「おはようございます。」

「おはようござゲッモツゲモツ！」

「プーチラモラー！」

琉田はそれら一つ一つを見て悲鳴をあげながら、なるべくゲモゲモ・プチラモラの事を考えないようにして逃げ続けていた。

プチラモラの謎

「はあっはあっ」

三人は、やがて人気ひとけの感じられない暗い街道に辿り着いた。

「ここまで逃げれば大丈夫だ。」

「そうだな。」

「牧ちゃん、大丈夫？」

そう藤上学に言われた牧中菜穂子は驚いて聞き返した。

「え？何が？」

「だってやられかけてたじゃん。」

「ああ、まあ今の所なんもないけど…え、何？」

「いや…あれの影響を少なくとも僕達よりは受けてるから…」

「なにその伝染病みたいな言い方。」

「まあまあまあ」

相田が間に入って言った。

「最初踊りだした人は謎だけど、今のところ、踊りの最後のポーズ」

そう言つて相田は「あなたも一緒にプチラモラー！」の時の格好、すなわち、足と足の間を拳三つ分空けて、手を広げて両腕で前方を指すあの格好をしながら言い続けた。

「このポーズの、この腕から強力な洗脳波動みたいなのが出てるのかな、この腕に指された人はほぼ確実にやられてる。でも牧ちゃんはそれを受けてるわけじゃないから…」

学が遮った。

「でも、牧ちゃんはつぶやいてたじゃないか。」

「まあ、そうでなくてもおそらく“彼ら”は洗脳波動をだしていると思う。いや、そもそもあの音楽自体にあるんじゃないかな。だから『反ゲモの会』が生じた。僕達もあれの影響は少なからず受けてるはずなんだ。だから牧ちゃん、安心して。」

「洗脳されるってどんな気分？」

話題を変えて藤上が質問した。牧中は答えた。

「よく分からないけど…誘われるの。解放感に。そんなのに引きずり込まれたら自分がおかしくなる、だめ、と思っても、頭がどんどんマヒしておかしくなるの。もう正しいとかそういう判断力がなくなつてあれの思考に吞まれるしかなくなるの。今はあれがないから大丈夫だよ。」

「つまりあれを目前にしたら自分だけでは不可抗力なのか。」

「そうね…ところで、様田くんや琉田ちゃんは？」

「連絡つかない…」

「そう…」

そして三人は黙りこんだ。よく耳を澄ますと「プーチラモラア！」という声が聞こえてきた。それは依然より増していた。

「ねえ…こつちに近づいて来てる？」

「いや、響きからして接近はしていないと思う。むしろ増えてるんじゃないかな。」

「え！嘘？」

嘘ではなかった。

いまや渋谷新宿池袋上野と、繁華街という繁華街はプチラモラに溢れていた。中心に謎の人物がいてその人と周りとの音楽に合わせて掛け声をしていた。

「あなたも一緒に」「プチラモラー！」

「世界を繋ごう」「プチラモラー！」

「偉大な神の名唱えよさあ！」「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー、イル・ナンケストラ・ウラ・ウー、イル・ナンケス…」

人々が何度も連呼する時中心の人物はニヤリと笑った。この人物は赤いヘルメットをつけていた。彼の名は赤ヘル。ゲモゲモ・プチラモラを歌った歌手だ。彼は全世界をプチラモラにしようという野望

を抱えていたのだ。彼は他に“正常”な人を教化しようと考え初め
ていた……

プチラモラの襲撃

しばらくの沈黙の後、相田が話し出した。

「まああれの話はひとまず置いて、楽しい話をしようよ。」

「たとえば？」

「うーん……たとえば……しりとり？」

そうして始まって、次に牧中、藤上、そして相田という順番になった。

「り……りす」

「す……すいか」

「か……かめ」

「め……めだま」

「ま……マロン」

「あ、『ん』言った！」

「藤上の負けー！」

「うそ？あ、あああ、やられた。」

「おまえ何しよっぱなから言っちゃってるんだよ。」

「だって、言っちゃったもんは仕方ないじゃないか。」

「言っちゃったもんって（笑）言っちゃったもんって……言っちゃった、言っちゃう……言っちゃう……」

突然牧中が笑うのをやめて無表情で呟き始めたため、二人は彼女を注視した。彼女は呟き続けていた。

「言っちゃう……言っちゃう………プチプチ言っちゃうよー、プチプチ言っちゃうよー、」

突然彼女が歌いだしたため、二人は一気に凍りついた。

「牧ちゃん！だめだ！」

「正気に戻れ！」

藤上は彼女を助けようと必死に揺さ振った。彼女の目は麻酔された

かのように焦点が合わなかった。

「牧ちゃん！」

その時彼女は呟くのを止め、普段のように話しかけた。

「ああ…二人とも大丈夫？ごめん、もう、私を置いていった方が…」

「いや、だめだよ。そんな事はできない…」

「そうだよ！今は大丈夫だろ？」

「そう…だね…」

「よかった…ん？」

ふと藤上が黙りだした。

「どうした？藤上。」

「……やばい…牧中のがこっちに移った、やばい！わああ、やめろ！くんな！プチプチ言っちゃう…だめだ！やめろ！」

「それを意識から追い出せ！」

「追い出そうとしてるよ！でもどんどん強くなってきた、うわっ！」

突然藤上はステップを踏んで激しく踊りだした。踊りながら彼は齒を食い縛って叫んだ。

「早く逃げろ！」

相田と牧中は逃げ出した。藤上は踊りながら耐えるように苦悶の表情をしていたが、やがてその表情は弱まって無表情になり、「プチプチ言っちゃうよー、プチプチ言っちゃうよー、」と連呼しながら二人の方にガニマタ歩きで近づいた。牧中は悲鳴をあげた。さつきまでは優しい青年だった藤上は今や我を忘れてひたすら歌い踊り続けているのだ。

「ゲツモツゲモツ、プーチラモラア！あなたも一緒に」

「伏せろ！」

相田は叫んだが牧中が伏せる前に藤上が両腕で「プチラモラー！」と洗脳波動を発射した。牧中に命中し、彼女は呼び止められたかのように立ち止まった。そして程なく「ゲツモツゲモツ！」と藤上と一緒に踊り出した。相田はそこから力の限り逃げ出した。大通りに

出たその時。

ずんずんずんずん。

規則正しい足音が背後から聞こえて来た。相田は不安に襲われた。振り向くと何十人いや何百人もの人々がいつせいに相田に向かつて「プチラモラー、プチラモラー、」と連呼しながらガニマタ歩きで行進して来た。相田は悲鳴をあげて逃げ出した。だが気が付けば目の前にも大群が歌いながら相田を追い詰めた。

「あなたも一緒に」「プチラモラー！」

相田が後ろを振り返ると後ろからも歌いながら彼を追い詰めた。

「世界と繋ごう」「プチラモラー！」

「偉大な神の名唱えよさあ！」「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー、イル・ナンケストラ・ウラ・ウー、イル・ナンケストラ・ウラ……」

「イル・ナンケストラ……うわ！」

いつのまにか呟いているのに驚いた相田は必死に逃げ道を探した。逃げ道は彼らの間に建つ塔しかなかった。彼はそこに逃げ込んだ。

塔の階段を上った。歌声が響く。前後左右が無理なら上しかない、とにかく上ろうと彼は歩き続けた。

階段の先には部屋に繋がっていた。だがその扉には見知らぬ、たくましい髭もじやの中年の男が待ち構えていた。彼はバットを握っていた。そして言った。

「止まれ。」

相田は止まった。なにやら嫌な予感がした。恐れを感じた。男は言った。

「お前は『反ゲモの会』のリーダー、相田小見郎か？」

相田は気付いた。そうか、街中が洗脳された今、僕は反逆者として処分されるのだ。死を覚悟して相田は言った。

「そうです。」

すると男はにやりと笑ってドアを開けた。おや、どういう事だろう、と相田は疑念を抱いた。

部屋に入ると、一人の女性が「あ、相田くん！生きてたんだ！」と嬉しそうに彼を迎えた。

彼女は琉田龍子であった。

プチラモラは迫ってきた

「琉田！生きてたんだ！」

「そう。私たち無事だわ。あれ？他は？」

「…様田は分からないけど、藤上と牧中はやられた。」

「……………」

「どうした？」

「様田の踊る姿を見つけたの。」

「え？」

「だから生き残ってるのは私たちだけね。」

「そんな…」

その時門番をしていた中年の男性が「俺もおるぞ」と言った。

「そうね…伊綱さんもいたわ。」

「だれ？伊綱さんて。」

「彼は命の恩人。たくさんあいつらに取り囲まれた時勇敢にも彼はあいつらを素手で倒したの。それで助かったわけ。あ、伊綱さんの意見も聞いてみる？」

「え？どんな？」

「では言おう。」

と、伊綱が喋り始めた。

「考えてみれば、どうしてあの歌にあれだけの力があるか、そしてどうやってあいつらがあんなまとまった行動ができるか。結論は一つだ。」

「え？なんですか？」

「聞けば分かる。」

そこで相田は耳を澄ましてみた。「あなたも一緒に！」と誰かが叫びそれに皆が「プチラモラー！」と応える。その声に聞き覚えがあったので、相田ははっとした。事の発端、それは…

「赤ヘル！」

「そうだ。やつらの教祖でゲモゲモ・プチラモラの歌手、赤ヘルだ。相田くんは最初あれが発生する現場を見たんだな。」

「はい。」

「おそらく赤ヘルは遠隔からテレパシーか何かで洗脳する技をもっている。やつらの中では最強だ。だから奴を倒すしかない。これが俺の意見だ。おそらく間違いではないだろうが。」

「ですね。」

しばらくして音楽が止んでいる事に三人は気付いた。勿論終わったわけではなく、赤ヘルと思しき男が何やら演説をして皆がそれに大声の相づちを打っていた。

「我々のゲモゲモ・プチラモラに幸あれ！」

「幸あれ幸あれ！」

「しかしながら我々に反抗する愚か者がいる！」

「誰だ誰だ！？」

「それはこの私が立っててている塔のなかにいる！」

「何何！！」

「よい子のみんなああああ！塔のなかに、進攻だ！」

そして音楽再開、「プチラモラー、プチラモラー、」と言いながら人々は塔の扉に行進した。

三人は顔を見合わせた。そして同時に言った。

「やばい！」

「塔の頂上にいる！」

「あいつらがくる！」

そしてどうしようかあたふたした。そのうち、突然伊綱が部屋の、階下に繋がる扉に向かった。

「伊綱さんなにを！」

「決まっとるだろ、やつらを食い止める。」

「でも、それでは……」

「早くせい！お前等は赤ヘルを食い止めろ！」

そう言つて伊綱は扉を閉めて階段の下へと向かった。すでに大勢の人々が「プチラモラー、プチラモラー、」と連呼しながら、暗い階段を規則正しく上つていた。バットを構えた伊綱は、暗がりから聞こえるうめきのような声と足音に対して叫んだ。

「さあ、きやがれ、操り人形めが、この先は貴様等には絶対邪魔をさせない！絶対にな！」

そう言つて伊綱は「ぬああああ！」と叫びながら彼らの方に突進していった。勝ち目は無い事は彼は悟っていた。

一方相田と琉田は部屋のもう一つの階段を上った。まだあの部屋は頂上ではなかったからである。「プチラモラー！」がかすかに周りから響く中、彼らは意識をそちらに向けないよう注意しながら先へ走った。

そしてとうとう梯子に辿り着いた。梯子の上は蓋になっている。この頂上に赤ヘルがいる。二人は顔を見合わせて決心したように梯子に登り蓋を開けた。

プチラモラの運命は

蓋を開け、二人はそこをよじ登った。そこは塔の頂上であつた。周囲から「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー」の掛け声が聞こえた。端に何者かが立っていた。赤いヘルメットに赤いマント、白いタイツに黄色い長靴。まごうことなき赤ヘルだ。

「そこまでだ！」と相田は叫んだが、赤ヘルはにやりと笑つて言つた。

「まあまあまあ、相田小見郎くん。落ち着きたまえ。」

「なぜ名前を知っている！」

「なぜ名前を知っているかって？きみはゲモゲモ・プチラモラの歌詞の意味がわかつてないようだな。」

「そんなの聞きたくもない！」

「まあそう言わずに。『ゲモゲモ・プチラモラ私も皆も繋がる』つまり、今踊っている君のお仲間さんからテレパシーで情報をいただいたのさ。」

「このやろう！」

「まあまあまあまあ、まずここから街を見渡してくれたまえ。」

相田は見回した。観戦場みたいに人々がこの塔の周りにびっしり集まっていた。皆「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー」と唱えた。赤ヘルは言つた。

「美しい光景ではないか？」

「何がだ！」

「人々が皆調和して一つの行動をしている。それは整然とされてて美しい。それなのに君はそれから外れようとしてる、ごみくずみたいな存在だ。」

「何を！？」

「くずも共に回れば星になる。君のその無意味な反抗をやめて、共に踊らないか？」

「やめる…」

相田は意識の背後からあの『プチラモラ』が迫りつつある事に気付いた。

「なぜ拒否するのだ。皆踊っているのに。」

「やめる、」

今や相田の意識に容赦なく「イル・ナンケストラ・ウラ・ウー」が響いてきた。全身が踊りたくてむずむずしてきた。

「もうつらいだろう。我慢しないで踊りなよ。」

「やめるー！ー！！！」

「相田くん！危ない！」

突然琉田が相田を押し倒した。それにより相田は急に正気に戻った。赤ヘルはそれに逆上して、「がああああああ」と叫びながら口から光線を出した。それは洗脳光線であった。洗脳光線はもろに琉田に命中し、彼女は硬直してへなへなとへたりこんだ。

「琉田！」

そして彼女の腕が突然動きだした。意志に反した動きに彼女自身が「えっ？」と言ったが次の途端体全体が踊り出した。彼女は悲鳴を上げた。

「いや！こんなのいや！助けて、助けつもっけもっ、プチラモラア！」

憑かれたように踊りだした彼女に相田が「そんな…」と信じられない思いで呟いた。赤ヘルは言った。

「あとは君だけだ。おとなしく我らの仲間に入るが良い。」

だが相田は「琉田アアアアアアアアアア！！！」と叫んで無表情に歌い踊る彼女に向かい合った。

「正気に戻れ！琉田！」

「ゲツモツゲモツ、プーチラモラア！」

「琉田！」

次に彼女が「あなたも一緒に」と言いながら相田を洗脳しようとする

腕を上げて

「プチラモ」

と叫んだ時、相田は突然彼女を抱擁した。目からキラリと涙を零しながら相田は言った。

「そんな事を言っちゃいけない…」

手の動きを肩で封じられた琉田は何度も「プチラモ」「プチラモ」と言いながら振り下ろした。そんな中彼は決心して言った。

「琉田…いや、龍子…こんな時に言うのもアレなんだけど…」

彼女は踊りもがいていたが彼はそれをひしっと抱き留めて言った。

「実は好きなんだ…」

突然琉田の踊りが弱くなった。力を弱めた踊りはやがて消失し、憑いたものが逃げたかのように彼女はほんの一瞬意識を失って膝立ちのまま頭がぐんと下がった。そして彼女は顔を上げて相田を見つめて、言った。

「私も…好きだったの…」

そして彼女は泣きだした。

「ごめんね、ごめんね…」 「いいよ。耐えられなかったんだろう。」

「ごめんね、ごめん…」

それを見て赤ヘルは一瞬パニックになったが、すぐににやりと笑って叫んだ。

「はーははー！愛は地球を救うてか？貴様等そんな仲良しなら共に踊るがよい！」

そして両腕から洗脳光線を発射し、二人に当てた。たちまち二人の意識に「プチプチ言っちゃうよー」が舞い込んで体が踊り出した。相田と琉田は顔を見合わせた。赤ヘルは死ぬ気で洗脳光線を当てていた。

そして相田と琉田は決心した。前方に走りだしたのだ。何すると赤ヘルが思ったその時、彼は二人に突き飛ばされた。赤ヘルは塔の頂上から転げ落ちた。「プチラモラー、プチラモラー」をバツクにゆっくり落ちているように見えた。塔になんどもぶつかって赤いヘルメットが取れ、彼は頭から地面に衝突して命を絶った。

それを合図かのように、今まで踊っていた人々は一斉に一時的に意識を失った。やがてはつきりした時、彼らは自分達が何かから解放された事に気付いた。わあああと歓声が上がった。

翌日に赤ヘルの葬式が行われた。赤ヘルを小さい頃からよく知る知人はこう言った。

「あの人はほんと小さい頃からどこからか拾ってきたヘルメットをかぶっては、プチラモラープチラモラーばかり言っていました。あの頃から赤いヘルメットをずっと被っていましたねえ。うん。はい。だからこんな事になったのも一種の定めかもしれません。」

「反ゲモの会」の五人は、一時期は踊りふける姿を見られた事で若干の気まずさはあったが、また再び仲良くなった。唯一以前と違うのは相田と琉田がより仲良くなった点である。これもプチラモラーのおかげとも言えるが、数か月後には皆、あの現象はなんだったのだろうと思うようになり、やがて記憶から消え去った。

それからさらに数か月後のある公園。少年真田健一は母親と共に遊びにきていた。健一は走り回るが母親は心配そうに見守っていた。そして途中彼は木の茂みに入ったが、その時母親は彼を見失い、「健一！健一！」と呼びながら探した。

その時彼は茂みの中に赤いヘルメットを発見した。なんだろうこれ、思ってかぶってみた。

その時母親は彼を見つけた。

「ああ、ここにいたの…探したわよ。」
その時健一は嬉しそうに言った。
「プチラモラー」

プチラモラの運命は（後書き）

誰か挿絵描いて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8772m/>

ゲモゲモ・プチラモラ

2010年10月28日06時29分発行